

開祖様御生誕一一六年祭 教主様特別講演 おやさまを語る



教主様より開祖様への感謝の想いが語られた

今日はご参集を賜り感謝申します。皆さんと一緒に心を込めて、おやさま有難う御座いますと三遍お唱えしたいと思えます。

「おやさま有難う御座います。」
「おやさま有難う御座います。」
「おやさま有難う御座います。」

今日はおやさまを語ることでお話しをさせて頂きたいと思えます。こういう本がございます。

私が四十五歳の時に書いたもので、この著書を書いてから全国出版の祈力の不思議や祈蹟の目醒め、気功パワーは日本にもあった、等の発刊が始まりました。拙い著書では有りますが、おやさまを偲んで私も新たな決意の表明として、奉読させて頂きます。

それでは「母を語る」という本の序章、第一遍に書いてあるところを奉読させて頂きます。

「私はこの著書を、これまでの四十五年の間、常に変わることにない、母心で、そして、教祖心(おやごころ)で、慈愛を垂れ続けて下さった母に、私の感謝の心の証左として捧げたい。」
人は誰しも心の中に、ひとつのさすらう魂を抱え、生命(せいめい)の河を越えゆくものでしょうか。

人として生まれ、人として生き、人として死ぬ。その一生の中で、生まれては消えてゆく水泡(みなわ)の様な中に歎び、哀しみ、苦しみ、怒り、やり場のない淋しさや嘆き、憂い、そして呪いに至るまで、すべての曲(よこしま)な心を捨て去った時に生まれてくる、柔かな母の乳房の様に柔らかい慈愛の心。私も又、さまざまな心の流転の果てに、今生きとし生けるもの、有りとし有るものすべてを良しとし、静かな心で受け入れることができる境地に近づくことができたのは、偏(ひとえ)に母なる人、教祖様(おやさま)の御教えにあったことを、くもりなき心で記すことができます。

私の母は、大和の信仰をする人々にとりましては、尊い大和の御教えを授けられしお立場でもあります。私にとりましては、この生命肉体を下された、母親でもあり、又、大和の信仰の御教えをお授け下さった、教祖様(おやさま)でもあるのです。母であり又、教祖(おや)さまでもあるのです。でも、私にとつては、そんな区別のつけられない存在であることが正直のところ。ここまですべてが母であり、ここからが教祖様(おやさま)であるなどという分け隔ては、とうてい私にはできないのです。私の心の中では、いつも優しき母(はは)であり、そして、厳しい教祖(おや)さまでもあるのですから。

私の幼い頃の母に対する想いは、かなり淋しいものでした。母は私にとつて母でありながら、いわゆる世間一般で言うところの母ではないのです。物心ついてから今日まで、いや今日でもなお、母は母である前に先ず、教祖様(おやさま)でした。人が心に母を想う時、感じるのであるう柔かな母の胸、暖かな乳の匂い、優しい呼び声、抱き寄せては頭をなでくれる掌のぬくもり、そのすべてが、私には無縁のものでした。この世に生を享け、物心ついた頃から学生時代のある時期に至る迄、母は私にとつて、母親という感情の全くわからない、他人の様な存在であったといつても過言ではないのです。

母は、母親である前に先ず、厳然として教祖(おしえのおや)であり、求道者でした。神の道を辿ることに己が全てを賭け、一介の、平凡な母親としての我が子への偏愛を拒みました。それが大いなる愛ゆえの、小なる愛への忌避であったとしても、幼い私に何がわかったでしょう。私はただただ母の温もりが恋しい、一人の幼児に過ぎなかつたのです。普通の家庭の如く、母親はいつも身近にはいないのです。一緒に食卓を囲むこともただの一度でもあったであろうかとの家庭環境で育つたのです。そんな、母に対し私も物心のついてきた中学、高校の一時期、やるせない気持ちをぶつける場もなく、心が荒び、ご心配をかけてしまった時期がありました。

私を大学迄入れて頂き、学生時代も好き放題のことをさせて頂いている時、合気道部の一人の友人が、突然こんなことを、私に言ったのです。「保積、お前は何でそんなに、ふてくされて生きているんだ。俺は家から二万円しか送りしてもらえない。お前は三万円、それだけでもいいじゃないか。月に一回は、お前のところの東京の教会に行けば、お母さんが来て、行けば会えるじゃないか。今迄のことは今迄のこと。お母さん一人で、女手一人で東京の大学迄出すということは、大変なことだ。俺のことは、両親揃っていても、大学に行くことは難しかった。それを頼みこんで入れてもらった。お前は何の不自由もないじゃないか。大学に行きたくとも、行けない人も沢山いるというのに、少しはお母さんのことを考えてみるよ」と。この時のこの一人の友人が、なにげなく言った言葉は数日の間、私の耳から離れなかつたのです。この友人の一言によつて、私に初めて、母親の有り難みを教えられたような気がしたので。そして、母の苦しみも少しは知りえる人間に大きく変化していったのです。

一人の妻でもあり、母でもある普通の家庭の女性として生きるべく道ではなく、大和の御教(みおし)えを世に説き、大和心(たいわのこころ)を世の人々に伝道すべく使命を、大國主大神より命(おお)せになられた、みこともちであるが故に。一人の母親としての当たり前のことさえも、胎をいためた子供にさえ、仕度くともしてやれぬ、その苦しさを、辛さを、悲しみを、だんだんと理解できる人間になつていったのです。

一人の女性として、一人の母としての当たり前の生活、ささやかな喜び、日毎に育ちゆく我が子への思い、それらすべてを胸の中にたたみ込み、封じ込めて、いばらの道を辿つたであろう心の苦闘を思えば、幼い日の私の心に去来した淋しさなど、物の数ではないのかもしれない。母が、自分の意志では抗うすべのない大いなる力、神の御心の体現者としての自分を自覚したとき、一人の、平凡な女性としての幸せの全ては失われたことと思えます。又、失わなければ得られない境地でもあったかもしれませぬ。母は母を捨て、女を捨て、妻という立場をも捨て、人としてのあらゆる欲望を捨て、神の道に入ったのです。血の縁に結ばれた我が子への愛、夫としての父への思い……それらのすべてを断ち切つて神の御前に身を委ねた時、母の胸に去来したものは何だったのでしょうか。私を産みおとす時に流したであろう百倍、千倍もの血潮と涙の海の中で、母は神の御教えを具現すべき教祖(おしえのおや)となりました。その、新なる自己の誕生へのみそぎ、痛みと苦しきは、私の想像をはるかに絶する程、極限のものであったと思えます。このことも、今思えば、大國主大神のお導きと、母の広い包容力のお陰と感謝せざるを得ないのです。

私も又、その母の血を享け、生命を享け、同じ道程を辿らねばならぬ身であることを思えば、言わば全てが修行であり、第一歩であつたとも思えるのです。

今にしてみれば、この学生時代の友人の一言の言葉も、大國主大神が、この友人をして、私の荒んだ心に、神の光を射しこんで下されたのでしょう。それ以来、私の心は、とても、楽になったのです。今迄の暗い世界が、急に明るく輝いてきたことを、今でもはっきりと覚えています。母の有り難み、東京の大学に入れて頂いたこと一つでも大変有り難いことであつたことへの自覚、そして、反省、感謝の想いが湧いてきたのです。そのような気持ちになると、母から受けたご恩は、これも、あれも、この時も、あの時もと、実に数えきれないぐらいのことを、して頂いていたのです。人は多くを捨て、少なきを拾い、あるがままの自然の理を、ただすなおな心で受け入れることによつてはじめて真の喜びが得られるのです。ひねくれた心の中は、自分だけの勝手な想いの不平不満だけで一杯であつたのです。そんな心では本当の母の有り難さなど、解るはずもないのは当然のことでした。

母は、大和の信仰は『心造りである』と、ことあるごとに、お話しなさいます。

そして、この私にも、母として、教祖様(おしえのおや)としての大きな願いがかけられていたのです。その有り難みを、今、しみじみと感じる次第です。

私も、すでに四十五歳を越え、大和教団に奉職させて頂き二十年を経ました。この期間、多くのお悟しやら、ご助言を頂きました。又、御自分自身のことでもフツともらされたこともありました。母の八十有余年の人生は、口では言い難き辛く苦しいことが数多くあられたことでしょう。でも、そんな苦しいことの一言も、私にはお話しにはなりません。とにかく、『大和の御教えを世に出して、人々の心に、大和心(たいわのこころ)を植えつけるのだ』というこの信念ばかりなのです。神懸かりをなされ、神の言葉を伝え、神事をなし、数十万の人々を、否それ以上の人々をきつと救われてこられたことでしょう。この偉大なる宗教人としての母を誇りに思う子供の一人として、そして、その母の人となり、少しでも、書き残しておきたいものと思ふのです。

時折、心の鏡に對峙するかのよう、私は私に問いかけます。私は母に似ているか、私は母に重なるか、私は「教祖(おしえのおや)の子」たり得るか。是とし、是とする心で、道を求め、道を辿り、道を・・・極めねばならない。

これが、私の唯一、そして無二の道なのです。

この著書を、ここまでお育て頂いた母への感謝と、己れ自身の反省をもこめて、そして又、大國主大神さまへの御恩に、少しでも報ゆるべく、母でもありおしえのおやの数々のお悟しの中から、いくつかを素直なる気持ちで書かせて頂きました。誠に拙き文ではありますが、母なる教祖様(おやさま)のお心や、お人なりが、少しでも表わしうることができればと願う次第です。

私は小学六年までは塩釜市香津町という高台の家で父親と過ごしました。父は私が小学校を卒業する時に校長先生、教頭先生、担任の先生方を呼んで私の卒業を祝ってくれました。先生方は皆プレゼントを持って来てくれました。今思えば、父親が私の卒業に心を掛けて、先生方を呼んで下さり一緒に祝って頂いたことは本当に有り難いことだったので、その頃は何とも感じませんでした。それ程の父親の私への愛情と先生方をお招きできる力を覚えてもらいました。

そのような私が、その一週間後に私は弟と一緒に仙台へ家出をしたのです。母親と一緒に暮らしたいか、母親の所に行きたいかと、ある信者さんが小学三年生頃から毎年学校に来て言うのです。会いたい、一緒に居たい。そんなこと当たり前じゃないですか。仙石線の電車に乗って、父が来るのではとおどおどし乍ら逃げました。そんな思いを今も忘れません。私や母親への、父親の思いを今考えると、どんな思いであつたのか。今の世であれば直ぐに争いが起きますが、争う事も無く、私を母の元へやってくれました。私は父親に年を重ねる度に、申し訳ない、申し訳ないと。大きな期待をかけて育てて頂いたのに、私が勝手に家を飛び出し、どんな風に父親は思っているのか。また母親をどんな風に思っているのかしら。私も少しは分かるようになりました。私の母も子供に對してあれもこれもしてあげたいとの思いでいながら、それが出来ない立場というものはどんなに苦しいのか。どんなに辛かったのかと、今更に思うわけです。私は父に對して、子供の頃の不義理がずっと忘れられません。大学三年生の時、「俺は昔家出をしたから親父の所へ行って頭を下げたい、うちの親父はすぐおつかないから付き合ってください。」と明大の合気道部の同期二人に頼み誘いました。小学六年でお別れをして、大学三年で勇気を持って友人と一緒に来ました。案の定、私が玄関を開けると、「何しに来たおめえら」という言葉が返ってきました。覚悟はしておりました。それでも座敷に上がりました。父親は台所に行つて冷蔵庫を開けてビールを三本持つて来ました。私たちの前に一本ずつ置きました。



節分祭の豆撒きをなされる開祖様

注ぎ合おうとすると、父は「やめろ、おめえが一番飲むから。」と父としての独特の愛情を示されました。「お父さん、合気道を見てくれる。」と言つて御神殿で合気道を披露しました。もう小学生以来の嬉しは消え、父は許してくれていました。それから何遍も、結婚してからも妻である教母さんや志弘を連れて毎年何遍も何遍も父親に会いに行きました。母である開祖様(おやさま)に申し訳なかつたけど、私は子供の名前は親父に付けてもらいたい。親父の心を残していきたいと思ひ、そして志弘という名前を付けてもらいました。やがて娘が生まれました。秀香と云います。今一緒に働いております。

秀香の時も、開祖様に言つて、父親に名付けてもらいたい。保積謙光という父親の生命の種を二人の子供に植えてあげたいと思ひ、名前を付けて頂きました。今こうして父親も、母親である開祖様も、二人の子供の心の中で生きていくものと。今日こうして開祖様の映像を見れば、毎年同じ映像であつても、本当に力をもらえる力強いお姿と言葉をそのつど新たな気持ちで頂きます。信者さんとお会いしている時の笑顔、本当に有り難く尊いものです。到底私は勝てません。本当にそう思います。私がやり残している開祖様とのお約束である、教勢の発展、大和の心というものを多くの人に植え付ける。それをまだ叶えておりません。これからどれだけ私も生きられるか。今迄修行に修行を重ねて種々の力を授けられ、これから世の中に信者の皆に發揮する時機であると心しております。世の中の人には私の歳ではリタイア。わたしはまだまだこれからです。開祖様も九十六歳まで生きられた。今日の映像でも八十五歳のお祝いで何とも力強い力を放たれておられます。顧問の相澤先生ももう八十五歳になります。私は七十八歳ですから、相澤先生に追いつく迄七年あります。しっかりと生きてはと。開祖様の御姿を思えば、この年齢でへこたれてはいられません。改めて心に誓わせて頂きました。次に開祖様の教えより何点かお伝えしたいと思ひます。

表題に「開祖様の御姿を思えば、この年齢でへこたれてはいられません。改めて心に誓わせて頂きました。」

昭和六十三年もおしせまつた頃、高橋史江教師より教団立教当初の実に苦勞多き時代のことを聞きました。そして、その話を聞き終えた時、一滴の大粒の涙が私の頬を伝つていたのです。私の心奥深くに一つの大きな感動と立教精神というものについて、厳しく悟されていたのです。

昭和三十年頃の教会(当時は教会であつた)は、内弟子と言われるような人が、十二、三人位おり、寢食を共にしてました。食事もお互いにお粗末なもので、梅干し、味噌汁、漬物位が当りまえであつたといひます。朝は三時には起床し、ただちに奉仕が始まるという修行生活でした。今の教師・職員達が、その昔話を聞けばきつと耳の痛いことでしょう。かく言う私もその一人であつたかもしれせん。

当時の教団は経済的にもなかなか大変な時期であり、それこそ一銭のお金も、一枚の紙でも無駄にできず、大切に使われていたといひます。今の人達から見れば考えられないような、質素儉約で驚くべきほど物を大切にしていたのです。開祖様はそんな苦難の中にあつても、常に明るく「さあ、皆で頑張つて人々をお救いさせていただきます、一日も早く教会を建てよう」と努力されてこられたといひます。握飯(おむすび)の二、三をもつて、朝三時頃から夜遅くまで毎日毎日祈禱に出かけられ、史江教師もお伴を命(おお)せつかり二年余、一緒に居たそうです。家祓いも教師の人たちでは一日にせいぜい十軒から十五軒位しか歩けないのに、開祖様は二十軒から二十五軒位祈禱されるのを不思議に思つていたといひますが、いざお伴をされるとその謎はすぐにとけたといひます。修行で鍛えられ、神の御力を賜つていゝるが故に五里(二十km)も十里(四十km)も歩くのに、人間の業では

到底はかり難い早さでありました。それ故についてゆくことができず、よくとり残されたことがあったといえます。私も中学生の頃、何度か一緒に歩かせていただいたことがありましたが、とにかく早いのです。少し歩くと後は走らねば追いつけない。史江教師にそのことを話され、私も至極尤もと感じていました。言葉をかえて言うならば、それはまさに神業であったとしかいいようがなかったのです。

教祖様は雨の日も風の日も暑い日も寒い日も、信者さん達のためにそれはもう毎日の如く祈禱に歩かれておられました。

そんな折、教祖様は「史江さん、明日から布袋二つ持って祈禱に行くと申されてそれを準備させました。史江教師は教祖様に怪訝な想いで何にその布袋を使われるのかお尋ねすると教祖様は「道端の釘や鉄屑を拾って入れる」と言われました。史江教師はさらに鉄屑屋さんみたいなことをしてどうするんですかと尋ねると、「拾った鉄屑を売って教会の建物代に使う」と言われたそうです。史江教師は教祖様に「そう言われて、普段でも恥かしい姿なのに鉄屑拾いまでさせられるんではもう嫌だ。どんな人に会うかもしれないし、何もそこまでしなくとも」と、恥かしさ故に教団をやめようかとも思ったそうです。当時の史江教師は年の頃二十代後半と末(うら)若き女性であったのですから、そう思うのも無理はなかったことでしょう。でも、教祖様はそんな史江教師には「こうおかまいなく、次の日より鉄屑拾いを始められたといえます。教祖様は自分の心の中を見透すように「史江さん、道端に落ちていいるのだから泥棒にはならないでしょう。神さまも世間様もきつと許して下さるさ。さあ、少しでも頑張つて、一日も早く皆の教会を造ろう。そして困っている人を沢山救おう」とおっしゃられて、せつせと鉄屑拾いの行脚祈禱が始められたということでした。後日談でしたが、教祖様ご自身もやはり気恥かしかったということでした。神さまの仕事と鉄屑屋さんの仕事は二年間は続けられたといえます。一ヶ月で蜜柑箱に一箱から二箱位は拾ったと、かなりの量であったようです。(当時の蜜柑箱は木の箱でできていました)拾った鉄屑を屑屋さんにもってゆきお金に替えて、教会建築資金のために貯えてこられました。金高にしてみれば微々たる額であったことでありましょう。でも教祖様のこの行為を考えてみて下さい。私達信者、教子達のために、一日も早く教会を造らんとするそのひたむきな心を。そのために、祈禱に歩かれるその時間を少しも無駄にせず、寸時をも惜しみ私達のためにお尽くし下さるその尊いお心を。

そのご苦労があったればこそ、その尊いお心があったればこそ、このように現在の大神社も、大和神光殿も立派にお造りすることができたのです。当時の教祖様や先輩教師の想いは如何ばかりであったことでしょうか。私達後輩教子等は、この立教精神を、立教当初のこの血と汗と涙の御心行を決して忘れてはならないのです。

教祖様の鉄釘一本までも拾わねばならなかった御心を、私達はどのように拝察し拝受すべきなのでしょう。

教祖様のお口からはこのような御苦勞話は一言もなかったのです。教祖様にとられては、過去はまさに過ぎ去りし日であり、これからのことしか見られておられないようです。少しでも信者さんのために、そして、どうすれば世の中を明るくできるのかと、大和の信仰の火を灯すことしか頭にはなかったようです。そして、教祖様のこのお姿は三十有余年経過し今なお続けられておられるのです。

当時の一本の釘をさえ、無駄にはできぬほど困窮されていたのか、物を粗末にしてはならないということであったのか、いずれにしてもそんなことはどうでもよいことです。ただ、私達のために、信者の皆さん方のために、神さまがお働きやすいようにと願いつつながら、そのために、是が非でも教会を建築するのだという、その尊い教祖様の御心行であったことだけは、決して忘れてはならないのです。

更には、教祖様と共に道を歩まれて来られた先生方の御苦勞をも断じて忘れてはなりません。現在の教団があるのも教祖様と共に幾多の艱難辛苦を乗り越えられてきた、先輩教師の方々の並々ならぬ努力の結晶なのです。私達後輩は、この御心行に報ゆるべく、立教精神を己が心に対し、不撓不屈の大和魂をもって、大和の御教を此の世に顕現せねばなりません。これが先輩教師の方々の義理というものでありましょう。史江教師は、その時の鉄屑箱を今尚大切に保存されてきたといえます。そして、辛い時悲しい時困った時に、一人そつとその箱を開けさびついた鉄釘をじつと見つめながら、当時の苦しかった時のことを思い浮かべるそうです。そのさびついた鉄釘の一本、一本が頭張れ、頭張れと励ましてくれる。こんなことで負けてどうする、負けては駄目だ、負けては駄目だ、どんなに辛く苦しくともじつと耐えて頑張つてくると、強く強く励まされるというのです。

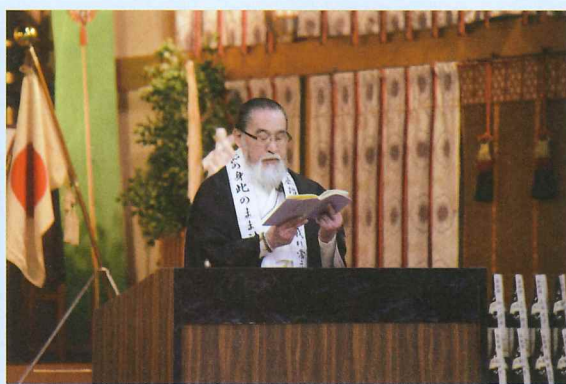
そして、最後に『この鉄屑の箱は、私の一生の宝物です。何ものにも替え難き宝物です。かけがえのない大事な大事な宝物です。この鉄釘一本、一本に、このさびた釘一本、一本に、私たちが想う教祖様の御心があるのです。教祖様の温かいお心が一杯に詰まっているのです』と、声を詰まらせながら話すその一言ひとことに私は、只々頭が下がるばかりでした。私の心の奥底で教祖様、史江先生、そして教祖様と共に道を歩みし先輩の教師の先生方、本当に有り難うございました。心あらたに誓わずにはおられない出来事でした。

この鉄屑箱は、否、尊い御心行の御箱は教祖様と先生方の立教精神の一つの実証とし、史江先生よりお許しをいただき、教団に永久保存となりましたことを付記す。

大和神光殿竣成にあたり

教祖様と先輩教師の皆様方の御心行を偲び識す。

平成元年一月十一日



『母を語る』を御奉読なされる教主様

この御山もそうです。何も無いところから始まってあります。雑木林に掘立小屋を作り、信者さんが通って来てくれて開墾されました。水が無いので、雨水を溜めてドラム缶に入れ、何日かごとにお風呂に入りました。信者さん方どの程の有り難い汗が、血が流れているか。今更ながらそれを感じます。代々に亘りそれを伝えなければもう誰も知り得ません。両親のこと、お爺さんお婆さんのこと、死んだら終わりで、お墓も無いでは、生きた証は何も有りません。先日、火葬だけの親戚の御弔いへ参りました。ずっと疎遠でしたが、拜む人も居ないなら、私に拝ませて下さいと言つて、柩の前で拝みました。

このような日本の社会にはならないと思いましたが。子供達が皆、遠方に住みお墓を守れないと、簡単にお墓を捨ててしまいます。「墓仕舞い」という言葉が現代では当たり前になってきました。本当にそれで良いのだろうか。墓は本来、終の棲家(ついのすみか)といわれるものです。魂の宿る、呼ばれてくれる。家の神棚、仏壇でもそうです。祈り、話し掛ければ先祖は来てくれます。それを教えてあげるのが、私たち大和信仰者の務めなのです。この世で亡くなり忘れられれば、あの世でも殺されたようなものです。

今日、開祖様が九十六歳で神上がりしてから二十年になりますが、私たちはこうしておやさま、おやさまとお慕い申しております。家でもお爺さんお婆さんを慕っていくことを教えねばなりません。死んだら終わりではありません。墓は墓でなく、大切な棲み処なのです。私共、大和は世の中に逆らつても、残さなければならぬことがあるものと、心に留めて頂きたいのです。御霊への供養を忘れてはなりません。何時でも言葉を掛ければ、思い出せば来てくれることを心に入れて頂きたいものです。もう一つだけ開祖様の教えを説きます。

「悪を憎まず拒まず 一救す力」

ある時私は、教祖様に「このような人間は断じて、教団に出入りさせることはならないと思います。これほどまで教団を教祖さまを愚弄し、不利益をきたした人間ですから、絶対に赦してはならないと思います。今さら泣き落としで、すがりついてきても教団に出入りは禁止すべきだと思います」と少々憤りをもって申しました。教祖さまはそんな私の話すことを、静かに目を閉じられて聞いておられました。

「教務総長、太陽を見てみなさい。お月さんやお星さんを見てごらん。太陽やお月さんは悪人だ善人だとか、誰かれと分け隔てをして照らしているのですか。光を放つておるのですか。違うでしょう。そうではないでしょう。太陽や月が、この人は嫌いだから照らしてや

らない、好きだから照らしてやるとか言って、分け隔てするようなこととは決してしない。悪人でも善人でも皆に平らかなのです。平等なのです。それが天地自然の理というものです。それが神さまの御心というものです。大和教団もその如くです。確かに昔は、いろいろと迷い、そのあげくのはてに過ちを犯し罪を造ってしまいました。教団にも私にもさんざんと悪口雑言を吐き捨て、世間にも流布してきたことでしょう。でもその人は、その後どのような想いで生きて来たかと思えますか。一時の感情で過ちを犯してしまい、とどのつまりが奈落の底にどんどん落ちてゆくだけではなかったのかと思えます。良心の呵責にもどれほどさいなまれてきたことかと思えます。そのような人が、又、大き義理ある教団に、私の元に頭を下げて来たのですよ。私は、その人が少しでも罪を悔い改めて救いを求めてきたとするならば、赦してあげるのが宗教の道だと思いますよ。そのような弱い立場の人間を邪険に蹴飛ばすようなことができるはずはありません。世間にも見放され、どうすることもできないからこそ、恥を忍んでこの教団に、私のところに頼って来たのでしよう。私たちまで見放してしまつたら、その人間は死ぬしかなくなってしまうかもしれない。私は甘いと聞かれるかもしれないが、それでもいいと思つています。そんな弱い人間を諸手を広げて迎えてやるこそ大和の教えです。それが一切を生かす教えであり、大國主大神さまの慈悲というものです。そして、それが真の宗教です」と、こう申されたのです。

私はこの教祖様の言葉に、余りにも大きな御心に、ただただ頭を下げ、己れの小ささを思い知らずにはおられません。とかくこの世は、罰することしかしない社会になってきています。無用の人間は放り出されてしまう情容赦のない世の中です。たつた一つの過ちで、長年務めあげてきた会社を放り出されることもあるのです。その人が会社のために数々の貢献をなしてきたとしても、そんなことは毛ほども評価されずに放り出される社会構造になってしまったのです。まして刑事事件など犯したものでないなら言うに及ばずであります。そんな殺伐とした、個我意識の世の中だからこそ、真の宗教が必要なのです。

一人の人間を駄目にし、生きる力を取りあげ殺してしまうのは簡単なことです。「お前は駄目な人間だ。本当に駄目な人間だ」と、ことあるごとに言い続けられ、又、一度の失敗も見逃さず、小さな過ちも赦さず罰してゆけば、まちがいなくその人間は自堕落失墜してゆくでしょう。そのことが知らず知らずのうちにその人間を殺してしまつていくのです。大きな罪を造つてしまつていくのです。何故なら生きるチャンスが少しも与えることをしないからです。「赦す」ということは、その人間に生きるべくチャンスを、そして、生きるべく勇気を与えるということです。弘法大師は、いろは四十八回まで赦してやりなさいと説かれたと申します。それだけ人間は過ちを繰り返すものだ、だから何回も何回も腹を立てずに大きな度量をもって説いてゆくことだと悟られているのでしよう。大和の信仰をする者ならば愛する我が

子に接するが如くの心をもって、人々に接することが大事でありましょう。教祖さまは、「弘法大師の申すが如く、いろは四十八回同じことで説いて赦しても、又、同じ過ちを繰り返す、そんな人間でも決して腹を立てることはない、怒ることもない、憎むことはない、馬鹿にすることもない、まして、その人間を審くことなどできるはずもないのです」と。私は、教祖さまの御心が、まさに天照大御神さまの御心であると、そう思わずにはおられなかつたのです。素盞鳴尊の数々の暴状にあつても決して叱られず許し給いて最後まで自らの反省を促し続けられた大御心、その尊い大御心そのものであられると強い感動を覚えていたのです。教祖さまのあの輝くばかりの笑顔は、まさに日神(ひのかみ) 太陽であり天照大御神であり、限りなきその慈愛は月神太陰であり、月読命であります。太陽も月も過今来変わることもなくこの世を照らし続ける如く、教祖さまの御心も輝き続けることでしょう。人を憎み、拒み、批判する心は、必ずや自分の運勢を破壊することでしょう。愚かなる心、小我小欲を捨て、大我大欲のもと、人の過ちを赦せる大きな心を持つことが開運へのキーポイントとなることでしょう。いわゆる、我がが小宇宙たる小精神を、神たる大宇宙の大精神に帰一することにあります。

この著書は私が四十五歳の頃に出版したものです。今、皆さんと一緒に読み解きました。昔は各家には家訓というものがあつた、それを家族は守つてきました。今やそれが無くなり、家族はバラバラになり天地の法則に反して争うことが多くなりました。太陽を真中に地球があり、そして、月があります。争うことは一つもありません。太陽は太陽のお務め、地球には地球のお務めがあり、夫々が一所懸命働かれておられます。休みもございません。その力を頂いているのが私たちの体です。五臓六腑も休み無し、心臓も脾臓も肺臓も休み無く働いて下されておられます。これも宇宙神理です。大自然の姿です。自分の体、心が満足して豊かになる。そのような体や心の使い方、仕事の仕方が神様の理に合うのです。



開祖様と教主様 昭和63年11月9日出雲にて

開祖様は何時も何気なくぼつんと説かれました。その言葉は心深くに残り、消えはしません。お金や物の施しはその時だけで受けても消えてしまひます。けれど、父や母、お爺さんお婆さんが遺した心にしみる言葉は消えることはありません。これを大和信仰者は守つて欲しいのです。親の背中を見て育つ環境はもう無くなりました。だからこそ教えなくてはなりません。伝えなくては分かりません。最後に私が作った詩を読ませて頂き、終わりとさせていただきます。

花のように生きる

絶対に貫くと決めたこの道です。試練が大きいほど私は強く生き抜きます。今は厳しいけれど、私は強く生き抜きます。障害の大きいほど私は前に突き進みます。自分の道の為に命の限り生きて生き抜きます。辛い時ほど自分がよく見えます。苦しい時ほど人の優しさを感じます。道の険しい時ほど尊い汗が流れます。今日、私は自分の道を切り開く為に一生懸命生きています。世の中には本心に力のある人が居ます。夢を大きく持つて強く強く生きていく人が居ます。私は今、挫けそうな弱い心を励まして、必死で生きています。花よ何故にあなたは変わることもなく咲けるのですか。人は生きることによって辛さを知り、安易な道を求めてしまふのに、花よ何故にあなたは変わることなく生きていけるのですか。私もあなたと同じように生きていきたいのです。明るく優しく美しく。そして変わることの無い強さをもって。



丁度、私も色々な悩みを持つていた時にこういう詩を作らせて頂きました。この天地自然、全て神様の教えです。それをもっとも分り易く説いてきたのが開祖様です。難しい学問を学ぶ訳ではありません。生きる知恵を頂くのが大和の信仰です。これからは大和の信仰、道を説く為の庭を沢山開いていきたいと思つています。天地宇宙との関わり、その命は如何なっているのか。この日本という国柄はどんな国なのか、先祖の歩んできた道は、人柄は如何なのかと、こういうことは私たちは普段は何も気にしないで生きています。自分の命の尊さを覚えることによつて、天地自然の神々の御心がどれ程有り難いものなのか。日常生活の道具、まして食べ物や物がどれ程の力をもつて私たちを支えているか。そのようなことを全く気にしないで生きていくけれど、気付かせてあげたいのです。

母親でもある開祖様が無言で私に教え、伝えてきたのです。私も歳は経たけれども気が付かせて頂きました。誰かがお話し下さるといふことです。皆さんと一緒に開祖様を偲んでお話しをさせて頂きました。どうぞ生きる為に、ただ生きるのではなく、弥栄となる現世、生き様をこれから大和という教えを更に学びながら、神様仏様に通ずる祈りを為して下さい。先ず祈ることです。開祖様も先程の映像で申して居られました。祈ることです。その力で色んなものを克服するのです。どうぞ皆さん拜んで下さい。トホカミエミタメカムナガラ イズノミタマ サキハエタマエ カムナガラ カムナガラ カムナガラ 天地自然に合致するという、その言葉です。カムナガラ カムナガラは神のまにまにということ。天地の法則に順つて生きる。その智慧を大和はこれから皆さんにどんどんと教えて参ります。そういう庭を開いていきたいと思つています。そういう機会を皆さんも作つて下さい。何方でも、息子さん娘さんも一緒にこういう話を聞いて頂いたら非常に神様も開祖様も喜ばれると思つています。今日は大変おめでとうございます。開祖様有難うございました。